
境界線上の、伝説の憑依者の伝説、のおとしもの

上杉 雪影

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

境界線上の、伝説の憑依者の伝説、のおとしもの

【Nコード】

N5438Z

【作者名】

上杉 雪影

【あらすじ】

その世界には東国無双と呼ばれる者、西国無双と呼ばれる者がいました、と。

だがもう一人天下無双と呼ばれる者もいた……………はず、と。

いろいろとタイミング悪いところに憑依しちゃった主人公、と。

うん、がんばって、と。

あと広域殲滅ってイイよね!!、と。

ヤシロイヤド、チロコノヲ願フコトヲモト、ヤ。

かっこつけることは必要かと

以上。(前書き)

かっこつけました

かっこつけることは必要かと 以上。

ある者は言った。奴はヒトの域を出た【化け物】だと

だがある者は言う。彼はれっきとした【人間】だと

だがある者は言った。奴は白と黒の翼を持つ【墮天翅】だと
ヴァイス・シュバルツ

だがある者は言う。彼は誰かを護る為にその翼を自ら広げた【天使】
だと

だがある者は言った。奴は紅の槍を持つ【神を殺す者】だと
ロンギヌス

だがある者は言う。彼はその槍で仲間を襲い掛かる恐怖を殺して道
を造る【人を生かす者】だと

だがある者は言った。奴は両の紅の魔眼を持つ【冥王】だと
イーノ・ドゥーエ

だがある者は言う。彼は己の為にその両の紅の魔眼から涙を流して
くれた【友】だと

だがある者は言った。奴は最強で最凶の【破壊者】だと

だがある者は言う。彼はその力で仲間を護り続けた最優の【守護者】
だと

だがある者は言った。奴は心無き【悪魔】だと

だがある者は言う。彼は心優しき【仲間】だと

《これはかつて【人】して生まれ【人】とは呼ばれなくなっ

た少年の物語》

かつこつけることは必要かと

以上。(後書き)

がんばるぞー

第壹線 神殺しの聖槍との邂逅（前書き）

いつだって

気が付けばもう

始まっている

配点（後悔と物語）

第壹線 神殺しの聖槍との邂逅

少し高い位置から月明かりが差し込んできている。

ふいに意識の覚醒を感じた

閉じままの重い瞼を持ち上げる。

開けた視界に映り込んだのは闇夜に浮かぶ白い“二つ”の月。

「・・・・・・・・・・・・・・・・？」

……おかしい

確か自分は・・・死んだはずだ、崩壊したビルの下敷きになって。

ふと自分の人生を思い出してみる。

生まれは不幸なことに暗部の家であった。

そう、裏の世界に深く関係する家だ。

更に不幸なことに長男に生まれたので当然家を継ぐ羽目になり、当然暗部としての教育もちゃっかり受けることに。

そして齡九つにして中国拳法、太極拳、合気道、古流武術、ムエタイ、カポエラ、バリツ等々のありとあらゆる体術を叩き込まれ。

ありとあらゆる武器の使用方法も叩き込まれた。

親がひどい親だったのかと聞かれればそんなことはない、ひどい親バカではあったが。

両親は優しくそれゆえに訓練には厳しかった。

でも崩壊したビルの下敷きになっても生還する方法は教えて貰って

いるはずもないわけで。
まあ要するに 死んだ。

「……………はずなんだけどなあ」

そう、確かに死んだはずなのに今、何事もなかったかのように自分の目には満月が“二つ”映っている。

「ん……………?」

二つ? あれ、月って一つじゃなかったっけ? ……あるえ? おつかしいなあ?

……………ああ! あれだな! そう、夢の中なんだなここは!

「……………はあああ」

深いため息を一つ。

さらにいい加減情けなくなつて来るので現実逃避をやめて

「はあ、いつたいどこなんだよ、ここはあ?」

頭を左右に振って辺りを見回すが、あるのは広大な平原のみ。

どうしたものかと思案しながら再び夜の空を見ようと視線を上げて
気が付く。

「月に、月の中央に黒い点がある」

片方の月の青白い光の中心に存在する割りと大きい目の点。

視線の先にある黒点は徐々にその大きさを拡大している様に見受け

られた。

それはこちらに向かつて“何か”が飛来していることを意味する。判断は一瞬。持ち前の身体能力を遺憾無く発揮して一気に15m程度を左に移動。

飛来する物体の全体を確認するために視線をもう一度月に向ける。

「あれは黒い・・・棒か？」

飛来する物体が六尺（約180cm）程の棒状のものである事を認識。

距離は目測で約250mといったところか、と肺に溜まった空気を吐き出そうとして

「っ!？」

驚きに目を少しばかり見開く。

飛来している棒がその角度を進行方向に対して10°程、右にずらした。

つまり、飛来している棒が左に移動して回避したはずのこちらを向いたのだ・・・速度をさらに上げて。

・・・へ？

「おいおい、ただ飛んで来てるんじゃないで、俺に向かつて飛んで来てんのかよ!？」

今も空を滑空している棒が到着地点を自分に設定した事を理解して思わず叫ぶと同時に体を動かす。

左に30mの距離を一步目から全力で走り、止まらずに棒をもう一度確認する。

だが、

「反応速度が上がってんのか!? もうこっち向いてやがる!」

棒と自分との距離は約200mにまで縮んでいる。

棒の速度がさらに上がるのを気にしながら、自らも大地を強く蹴り速度を上げて移動を行う。

さらに30mを駆け抜け、視線を上げて

「くっ! 方向の修正が早い!」

すでに棒はこちらを向いている。ここで棒との距離は100mを切った。だがそれでも走りを止めない。

棒の速度は上がる一方。ならば、と張り合うようにこちらも速度を上げる。

自然に自分の口の端がつり上がるのを感じる。

夜の冷えた空気が顔に当たることなど気にも留めずにさらに速度を上げていく。

距離が50mを切る。

そこで、なおも速度を上げ続けて走る体をくの字に折り曲げ急制動を掛ける。当然の様に体には衝撃が、大地には土煙が、それぞれ発生する。目覚めた時に何故か履いていた変わった靴が削れてしまうことは必要な犠牲として処理するつもりだ。

だが、変わった靴は丈夫な材質で出来ているのか激しい摩擦と衝撃を受けたにも関わらず傷一つ付かない。

……この靴、一体何で出来てるんだ?

しかしそんな思考は一瞬の内に終えてすぐに視線を上げる。そして、

……見つけた

棒との距離は約25m程まで縮まっている。

だがこちらはまだ動かない。

……20m

まだ動かずに棒を睨みけている

……10m

まだ動かない

……8m

長く息を吐き出して全身から力を抜く

……6m

だがまだ動かない

……3m

すぐに動けるように大きく息を吸って全身の筋肉を緊張状態に移行させる

……2m

ゆっくりと少しだけ腰を落とす

…… 1 . 5 m

緊張状態の全身に力を加えていく

…… 1 m

力を加え続け、全身の筋肉で力を溜める

…… 0 . 9 m

動かない

…… 0 . 8 m

まだ動かない

…… 0 . 7 m

そして、

…… 0 . 6 m

動く

一瞬で腰を低く落とし、右足を少し後ろへと引く。
全身に限界近くまで溜まった力を、大地を蹴るために己の右足裏に

叩き込む。

一連の動作を行いながらも上半身を地面とほぼ水平になるまで倒し、渾身の一步を――踏み出す。

飛来していた棒が先ほどまで自分の頭のあった空間を通り過ぎて行き、空を切る鋭い音と後頭部に風圧を感じる。

と、同時に柔道で言う『前回り受身』を行う。それもかなりの速度が付いた状況で。

地面に背中を半分付けて視線が頭上にある両足の間から夜空を見る。だが、あまりに速度が付いているためそのまま受身をとれば勢いよく地面を滑る事になるのは想像に難くない。更に、受身をとって地面に体を五体投地（逆ver.）することになればすぐに体を動かす事ができず危険だ。だからここで一つ。

《速度の使い道は走ったり避けたり攻撃したりするだけではない》

「……あら……よ！ ………………つと」

腰が地面に着く前に左肘を起点として強引に体を左にフィギュアスケートの様に回転させる。そして不思議な靴を履いた両足のつま先を地面に着ける。

耳に入って来たのは地面を不思議な靴が滑る音と回転の起点とした左肘が擦れる音。

そして、棒が地面に激突したのであるうぐぐもった、しかしそれについて大きな音。

すぐに左手の五指を握って拳を作り、その拳を地面に叩きつける。反動で体が少し浮き上がり、そのまま左肘を伸ばしてとるのは体を起こす動き。

更に、地面を滑っていた両足のつま先に力を入れて踏ん張る。

結果は慣性の法則に従って体は立ち上がる様に跳ね上がった。

つまり、起き上がる事には成功した。

だが、棒がまだどうなったのか分かっていない。先ほどからずっと視線を向けているが立ち上がった土煙に邪魔をされて確認が出来ない状態だ。

だから、跳ね上がった勢いを殺して更には腰を落としてすぐに動ける態勢をとるために右足を一步後ろに下げて少し強く地面を蹴る。地面を蹴った反動で前に戻って来た右足を、腰を落とす動作に合わせ少し斜め前に置く。だが、腰を落としただけではすぐに動くことは出来ない。

体重の重心を前に置き、踵かかとを上げて少し前傾姿勢をとる。この時左右の足に掛ける体重は、4：6にする。何故なら両足へ均等に体重を乗せてしまうと左右どちらへも行けるが瞬発力が二分されてしまうからだ。

態勢を整え終えてみじかく息を吐くと、徐々に晴れていく土煙を睨みつける。

「……さーて、何ができることやら」

そう、このまま逃げなかったことを後々後悔することも知らずに睨みつけていた。

第17線 神殺しの聖槍との邂逅（後書き）

どうも雪影です。

前回中途半端で上げてしまったやつ completion ですか？

『神殺しの聖槍』でもう分かった方も多いんじゃないでしょうか。

そう、ヤツです。紅くてDNAみたいなヤツですよ。

次話も一応プロットの何かは出来ているので出来るだけ早めに上げたいです。

不定期ですがよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5438z/>

境界線上の、伝説の憑依者の伝説、のおとしもの

2012年1月9日20時52分発行